

視点, モダリティと「人称制限」*

西垣内 泰介

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

gauchi[at]shoin.ac.jp

Modality, Point-of-View, and the First-Person Restriction

Taisuke Nishigauchi

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

日本語の感覚・感情や欲求など、いわゆる直接的経験を表す表現について、視点投射の構造とそれに伴う指標付与の観点から考察する。これらの文は主節に認識投射が現れる構造に関連付けられる。通常は認識投射のみが独立して節を成り立たせることはなく、証拠性投射、発話行為投射が現れ、その指定部に、デフォルトでは話者によるコントロールをうける pro が存在する。Kuroda (1973) の云う「(非) 報告体」は、認識投射の上位にある発話行為投射の指定部にある pro の指示が談話トピックによって決定される時に見られる現象である。この観点から、関連する構文を含む阻止効果の現象を考察する。

This paper discusses the syntactic and semantic properties of linguistic expressions in Japanese denoting so-called direct experience, such as sensations and optatives, with reference to the POV (Point-of-View) projections and indexing. These sentences are associated with POV structures with the Epistemology projection (EpisP). The EpisP is normally accompanied by the Evidentiality (Evid) and/or Speech Act (SpAP) projections. In the Spec position of these projections is a pro which is controlled by the external speaker by default. The (non-)reportive style in the sense of Kuroda (1973) is observed when the pro in the Spec of the SpAP which lies above the EpisP in the structure. From this viewpoint, the blocking effect involving the related constructions will be examined.

*本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「「視点」にかかわる言語現象と理論言語学」(2018 年度～2022 年度, 研究代表者: 西垣内 泰介, 課題番号: 18K00599) による援助を受けている。

キーワード: 視点投射, 「自分」束縛, (非) 報告体

Keywords: POV projections, reflexive *zibun*, (non-)reportive style

1. 1人称制限と「(非) 報告体」

日本語の感覚・感情や欲求など, いわゆる直接的経験を表す表現について, Tenny (2006) は次の文に見られる対比について議論している。

- (1) a. 寒い時, タカシは暖房を入れた。
b. 寒いので, タカシは暖房を入れた。

「寒い」は人の直接的経験, 感覚を表す表現として使えるほか, 部屋などの環境を叙述する表現としても使える。しかし, 人の直接的経験, 感覚を表す時は1人称に限定される。「私は寒いよ。/*タカシは寒いよ。」(1a) では1人称の主語が存在しないので「寒い」は環境についての叙述としてのみ使うことができる。¹

Tenny (2006) はこの1人称主語の要求は証拠性によって解除されると考える。

- (2) タカシは悲しそうだ/ 悲しがっている。

「そうだ」「がる」という証拠性を表す助動詞の要素が用いられると, 証拠性にもとづく(話者の)観察として1人称以外の人についても直接的経験を表現することができる。Tenny (2006) は次の例について, (3a) では「寒い」と感じる人が手をあげ, (3b) では寒そうにしている人を指さしたり名前を言うことが答えとなるという指摘をしている。

- (3) a. 寒い人は誰ですか?
b. 寒がっている人は誰ですか?

理由を表す接続表現「ので」には証拠性の意味が内包されていることが(1b)の容認性を説明する。

Tenny (2006) は(1b)で「経験者」(experiencer) すなわち「寒い」の主語となる項(「タカシ」にコントロールされる pro) が証拠性の投射領域 (Evidential Phrase = EvidP) の指定部へ移動を受けることで認可され, それによって(1b)には「寒い」が「タカシ」の叙述としての解釈があることを説明する。

Kuroda (1973, p. 383) は, (4a) のような, 本来非文法的とされる, 直接的経験を表す形容詞が3人称の主語に用いられる, 日常会話では用いられないタイプの文について論じている。

- (4) a. 山寺の鐘を聞いて, マリは悲しかった。
b. 山寺の鐘を聞いて, マリは悲しがった。

このような文は「非1人称の語りにのみ用いられる」として, 次のようにつづけている。

¹ 「時」節が証拠性投射をまったく含まないという判断には疑問がある。

(i) ジョンは{寂しい/悲しい}時 ブルースを歌った。

この文での「寂しい/悲しい」はジョンの直接経験についての叙述である。

Such a sentence can be used when the omniscient narrator ... adopts the point of view of its third person subject.

(4a) の場合で言うと, 「全知」 (omniscient) な語り手がマリの視点になりきってその個人的直接的経験を語っている。Kuroda (1973, p. 384) は, このような本来なら容認されない文を可能にする「文体」を「非報告体」 (non-reportive style) と呼んでいる。他方, Kuroda (1973, p. 384) は, (4b) のような証拠性を含む文について, 次のように述べている。

[T]hey are understood as a report from a narrator's point of view, a narrator who is not referred to in the story and perhaps omnipresent but not omniscient.

このような「文体」が「報告体」 (reportive style) である。この文では, 語り手 (話者) が自身の視点を持ち, その視点から (証拠性に基づいて) 事態について報告しているのである。

2. 阻止効果

主節が「(非) 報告体」であるかの違いと「自分」束縛との関連性は, Sells (1987) の例文 (65)–(66) で議論の対象になっている。次は Sells (1987) の例に変更を加えたものである。

- (5) ヨシコが自分_iを呼びに来た時 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 太郎}_{i1} \text{は眠たがっていた。} \\ \text{b. 太郎}_{i1} \text{は眠かった。} \end{array} \right\}$

Sells (1987) は (5a) の「太郎」は Pivot (軸, 基準), (5b) の「太郎」は Self (心理表現の対象) ととらえ, 主にこれらの項が変項 (variable) としての解釈を持つかという観点で議論している。このままの対比では, (5ab) の間には特に顕著な差はないが, 阻止効果に関わる負荷をかけると差異が生じる。

- (6) 僕の妹が自分_iを呼びに来た時 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. } ?^* \text{ 太郎}_{i1} \text{は眠たがっていた。} \\ \text{b. } ? \text{ 太郎}_{i1} \text{は眠かった。} \end{array} \right\}$

「がる」は Aoki (1986), Tenny (2006) などで日本語の証拠性表現と考えられているが, 私が尋ねた日本語の話者の中には (6a) は (6b) と比べてはっきりとした容認性の違いはあるが, その度合いはあまり大きくないという反応があった。²そのような話者は次の文のように明確に証拠性を表現した文にすると, 「自分」束縛は (6b) とよりはっきりとした対比を感じる。

- (7) *僕の妹が自分_iを呼びに来た時, 太郎_{i1}は眠そう (な表情) だった。

そのような話者にとって, 「がる」は認識表現 (のいわば 3 人称版) と証拠性表現の間に位置するような存在なのかも知れない。

²これは, 「眠たがる」に「眠い眠いと言う」という意味があることによるのではないだろうか。つまり, この解釈では太郎は「伝達源」すなわち Speaker と考えられ, (12) における「マリ」とステータスが同じということになる。

ここでの違いは、(6a)の主節には「眠たがる」という証拠性表現が使われているのに対し(6b)では「眠かった」と直接的経験をそのまま表現している点である。後者では、いわば文中の主語「太郎」の心に入り込み、「太郎」になりきった気持ちでこの文を読むと、「時」節の「来た」も「太郎」の視点からのダイクシス表現となり、「自分」束縛が可能になる。このような言い方(書き方)は、日常の会話では用いられることはなく、登場人物の心理表現を主とする小説などで見られる特殊な「文体」である。

「(非)報告体」に関わる構文の違いが「自分」束縛の阻止効果(と思われるもの)の発生に関与している。「報告体」で主節に証拠性表現を含む(6a)では阻止効果が発生し、「非報告体」でのみ容認される(6b)では阻止効果はないということである。次の節で、この文体についての問題が本論文で展開している視点投射を中心とする節構造およびコントロールに基づく分析とどのように関連づけられるかを明らかにする。

3. 認識表現の投射

「不安だ」「悲しい」のような直接経験を表す表現は、Speas (2004)の視点投射でいうと認識表現の投射(Epistemological Phrase)が現出し、その指定部にその感情の持ち主(experiencer)が存在する。

(8) ... [_{EpisP} Experiencer [_{IP} ...] Epis]

(6a)の「眠たがる」を含む構文では認識表現の投射 EpisP の上に証拠性表現の投射が現れる。この時、この投射指定部の pro のコントローラすなわち「視点保持者」は、「観察者」(Witness)の役割を持つ(Speas 2004)。

(9) ... [_{EvidP} pro [_{EpisP} Experiencer [_{IP} ...] Epis] がる _{Evid}]
 \uparrow
 ‘Witness’

西垣内(2015)で仮定したように、視点投射の主要部が主要部移動を受け、その領域を広げると考えると、Epis は Evid の位置へ繰り上げを受けることになる。

(10) ... [_{EvidP} pro [_{EpisP} Experiencer [_{IP} ...] Epis] Epis-がる _{Evid}]
 \uparrow
 ‘Witness’

「観察者」は、文中に他に候補がなければ文の話者がそのコントローラとなり、「視点保持者」となる。これによって、(4b)の「悲しがった」が話者の視点からの記述となることを捉えることになる。

日本語では(8)のような認識投射が、発音される形式としては上位の証拠性投射などを伴わず、いわばそのまま現出することは主語が1人称の時をのぞいてないのだが、3人称の主語でも許されるのが、前節で見た Kuroda (1973)のいう「非報告体」である。「非報告体」は、認識投射の指定部に現れる表現の指示対象に話者が「全知」(omniscient)の「語り手」としてなりきった時に可能となる。

本論の枠組みでは、この「語り手」となるということを「言語行動」投射 Speech Act phrase (SpAP)の指定部に現れる要素として捉える。「認識投射」の直上に証拠性投射で

はなく、SpAPが投射するのである。さらに(10)におけると同じように主要部移動が起こり、次のような表示が得られる。

- (11) ..._[SpAP] **pro** _[EpisP] **Experiencer** _[IP ...] **Epis** _[Epis] **Epis-SpA**]
 ↑↑
 ‘Speaker’

SpAP 指定部の pro は、通常の場合文の話者によるコントロールを受ける。直接的経験を表す文の「一人称制限」と言われるものは、であるが、Speaker の資格を持つ文中の登場人物によってコントロールを受けることもある。次の文における発言動詞の主語がその一例である。

- (12) マリは山寺の鐘を聞いて悲しかったと言った。

4. 談話トピックと視点

「非報告体」が SpAP 指定部の pro が Speaker の資格を持つ文中の登場人物によってコントロールを受けるもう一つのケースだが、(4a) のような「非報告体」を考える上で、Hinterwimmer (2019) による自由間接談話 (Free Indirect Discourse: FID) の性質に関する議論が参考になる。³Hinterwimmer (2019) は FID における視点保持者は、その談話における談話トピック (Discourse Topic) に限定されるとし、次のような対比を提示している。

- (13) a. Susan looked at *George* hatefully. *The dumb jerk* had managed to make her look like an idiot at the meeting yesterday.
- b. *Susan* looked at George hatefully. *#The mean old hag* had managed to make him look like an idiot at the meeting yesterday.

(13a) における the dumb jerk は George を指すと解釈できるが、同時にこれを Susan の視点を表す表現とみることができる。Susan の目から見て George が dumb jerk なのである。これはこの談話での Susan が談話トピックと読むことができるからである というのが Hinterwimmer (2019) の主張である。また、次の文は (13a) と真偽条件に関わる意味は同じと考えられるが、ここでの dumb jerk の解釈は (13a) と微妙に異なっている。

- (14) It was Susan who looked at *George* hatefully. *The dumb jerk* had managed to make her look like an idiot at the meeting yesterday.

ここでの dumb jerk は George を指すと解釈できるが、それはあくまでこの文の外的話者つまり発話をしている人（私）の視点を表すものとし解釈できない。この文では分裂構文が使われていて、Susan は焦点を表す表現となっており「談話トピック」ではないので、視点保持者とは解釈できない。

- (4a) のような「非報告体」においても同様の観察が可能である。

- (15) a. *山寺の鐘を聞いて、マリだけが悲しかった。
b. 山寺の鐘を聞いて、マリだけが悲しがった。

³ 「非報告体」がFIDと同じものを指すのか、テクニカルな考察が必要である。「視点保持者」の性質については共通したものがあるという観点でここでの議論を進める。

(15a) ではマリを談話トピックと読むことができないので、この文をマリを「語り手」とする「非報告体」の文として読むことができない。

以上の考察から、(4a)に見られる「非報告体」の視点現象は次の視点投射の構造と指標パターンで捉えられることになる。

- (16) $[_{DTopP} \quad DP_i \quad \dots [_{SpAP} \text{ pro}_i [_{EpisP} \text{ Experiencer } [_{IP} \dots] \text{ Epis}] \text{ Epis-SpA }]]$
 \uparrow
 談話トピック

単に「トピック」ではなく「談話トピック」が関与しているというアイディアは、Nishigauchi (1999) で考えられた次の文の多義性に新しい光を当てる。

- (17) 山田は 長女が医大に入ってしまった。

Nishigauchi (1999) の観察では、(17) は評価を表す視点表現「しまう」の解釈について多義性がある⁴。評価の「しまう」は通常は話者の驚きや（通常）ネガティブな評価を表し、その場合「山田は」はトピックと考えられるのだが、(17) は山田の困ったという気持ちを表す文として読むことができる。つまり、(17) は次の2つの言い換えによってその多義性を示すことができる。

- (17') a. 山田について言うと、彼の長女が医大に入ってしまった。学資をどうするんだらう。
 b. 山田: 「長女が医大に入ってしまった。学資をどうしよう。」

「山田は」を単にトピックとしてしまうと、後者の解釈における「山田は」のステータスをどう考えたらいいのだろう。Nishigauchi (1999) では、この「山田は」を「しまう」を主要部とする EvalP (Evaluative Phrase) の指定部に現れる要素と考えている。

ここでは、Hinterwimmer (2019) の FID に関する分析に従って (17) の「山田は」が「談話トピック」である時に、この文の2つめの解釈、すなわち山田の困った気持ちを表す読みと関連付けられると考える。もう一つの解釈、山田についての話者の驚きを表す読みにおいては、「山田は」は「文トピック」と呼ぶ性質を持つと考える。この線に沿って、(17) は次の2つの構造表示を持つことになる。

- (18) a. $[_{STopP} \text{ 山田は } [_{SpAP} \text{ pro } [_{EvalP} \text{ pro } \dots \text{ しまう }]]]$
 \uparrow
 ‘Speaker’
 b. $[_{DTopP} \text{ 山田}_i \text{ は } [_{SpAP} \text{ pro}_i [_{EvalP} \text{ pro}_i \dots \text{ しまう }]]]$

SpAP 指定部の pro はその指標がデフォルトでは話者となるが、談話トピックが明示的に存在する場合—これが FID ないし「非報告体」の成立のための必要条件—は談話トピックによって決定されると考えると、その下に現れる視点投射の指定部の pro の指標も、他にコントローラとしての候補がない限り SpAP 指定部の pro の指標によって決定されることがよって、(18b) の視点投射の構造と指標パターンが「非報告体」の意味的特性を捉える。

⁴久野 (1983) は「(て) しまう」には主語にとって不利益であるという読みと、発話当事者、通常「話者」が困ったと感じている読みの2つの用法に対応する多義性があると観察している。

「非報告体」の成立条件として「談話トピック」の存在が挙げられることは、次の「文トピック」を含むと考えられる文によって示すことができる。

(19) 山田くんはゼミの教授が不合格にしてしまった。

この文は、山田くんについてゼミの教授が彼を不合格にしてしまったという（話者の）驚きなどを表す文としての解釈は可能だが、山田くんの気持ち、「ゼミの教授が僕を不合格にしてしまった。困った」を表す文として読むことはできない。いわゆる「主題化」(Topicalization)によって派生されるトピックは「文トピック」であって「談話トピック」ではない。

5. 視点投射と阻止効果

ここまで見てきた視点投射の構造の観点から (6ab) に見られる阻止効果に関わる対比について考える。

(6) 僕の妹が自分_iを呼びに来た時 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. ?* 太郎}_i \text{は眠たがっていた。} \\ \text{b. ? 太郎}_i \text{は眠かった。} \end{array} \right\}$

西垣内 (2014) で示された阻止効果の分析では、(6a) に見られる阻止効果は次のように捉えられる。ここでの「自分」はダイクシス投射 (DeixP) の主要部「来る」と「一致」の関係を持ち、さらに DeixP 指定部には pro が投射される。この pro が「太郎」によるコントロールを受けることを妨げるものはない。

(20) [_{DeixP} pro_i 自分_iを ... 来た_i] ... 太郎_i ...

西垣内 (2014) は、「僕」のような直示表現の存在が Deix 投射を引き起こし、両者の間に「一致」の関係が生まれ、さらに DeixP 指定部に pro が投射され则认为する。

(21) [_{DeixP} pro_j 僕_j ... [_{DeixP} pro_i 自分_iを ... 来た_i] Deix_j] ... 太郎_i ...

この構造は西垣内 (2014, 121) が日本語に見られる阻止効果を捉えるものとして提示している次の一般化に抵触する。

(22) 「視軸クラス (Axis class)」視点投射の指標は同一でなければならない。

Deix 投射は「視軸クラス」の視点投射であり、それぞれ異なった動機付けで投射している「視軸クラス」の投射が異なる指標を持っていることで (6a) の阻止効果が説明される。

通常の「報告体」の文の特性として、(21) の上位の DeixP 指定部の pro は SpAP 指定部の pro すなわち「話者」と一致する。

(23) [_{SpAP} pro_j ... [_{DeixP} pro_j 僕_j ... [_{DeixP} pro_i 自分_iを ... 来た_i] Deix_j] ... 太郎_i ...]

(6b) において阻止効果が見られないことの説明は、まさにこの点に関連している。「非報告体」のこの文の特性は、SpAP 指定部の pro の指標が「外的話者」ではなく、「談話トピック」によって決定されることである。

- (24) $[_{\text{SpAP}} \text{pro}_j \dots [_{\text{DeixP}} \text{pro}_j \text{ 僕}_j \dots [_{\text{DeixP}} \text{pro}_i \text{ 自分}_i \text{ を} \dots \text{ 来た}_i] \text{ Deix}_i] \dots] \Rightarrow$
 $[_{\text{DTopP}} \text{ 太郎}_i \text{ は} \dots [_{\text{SpAP}} \text{pro}_i \dots [_{\text{DeixP}} \text{pro}_i \text{ 僕}_j \dots [_{\text{DeixP}} \text{pro}_i \text{ 自分}_i \text{ を} \dots \text{ 来た}_i] \text{ Deix}_i] \dots]]$

SpAP 指定部の pro の指標が DeixP 指定部の pro の指標を決定し、それによって指定部-主部の一致 (Spec-Head Agreement) によって主要部 Deix の指標も i となる。その結果「視軸クラス」の投射に矛盾した指標パターンがないことによって (6b) において阻止効果が見られないことが説明される。

このような文脈では外的話者は「太郎」の心に入り込み、いわば「太郎」になりきっているので、「僕」はこの文脈では文の中の登場人物のひとりにすぎない。次の、George Lakoff に帰因する例文を想起させる現象である。

- (25) I dreamed that I was Marilyn Monroe and that I kissed {me / *myself}.

後半の文の主語は夢を見ている私、目的語は Marilyn Monroe になった私であり、指示の同一性がないため、この文は目的語が me でも束縛条件 B の違反にならない。

6. 「よ」

Kuroda (1973, pp. 384–6) は文末に終助詞「よ」をつけることによって「(非) 報告体」に関する文体の違いを明確にできると述べている。「よ」の機能は I am telling you という意味を付加することで、文を明示的に報告体にするのである。

Kuroda (1973, p. 385) は次の文 (彼の (33)) について、この文は通常の読み方では「自分」束縛は不可能とした上で、

- (26) ジョン_iはビルが自分_iをほめた時、メアリのそばにいた。

この文を非報告体で読むと「ジョン」を先行詞とする読みが可能になるとしている。さらにその上で、(26) の文末に「よ」をつけると報告体になって、「自分」束縛の解釈はなくなるとしている。

- (27) *ジョン_iはビルが自分_iをほめた時、メアリのそばにいたよ。

「よ」の働きは、Kuroda (1973) が言うように I am telling you という意味を付加することである。つまり「発話行為」を明示的に表すのが「よ」の機能であり、視点投射の体系ではもっとも上位の投射として「発話行為」(Speech Act, SpA) の投射 (SpAP) に関連付けられるものである。さらに、「よ」を主要部とする SpAP 指定部には外的話者を指すよう指定されている pro が存在する。

- (28) $\dots [_{\text{SpAP}} \text{ pro } \dots \text{ よ}_{\text{SpA}}]$
 \uparrow
 Speaker

(26) では「ジョン」が「談話トピック」である可能性があり、SpAP 指定部の pro の指示を決定することができるが、(27) では SpAP 指定部の pro が外的話者と指定されていることで、これら 2 つの文の「自分」解釈の差異が説明される。

7. まとめ

日本語の感覚・感情や欲求など、いわゆる直接的経験を表す表現について、視点投射の構造とそれに伴う指標付与の観点から考察した。これらの文は主節に認識投射が現れる構造に関連付けられる。通常は認識投射のみが独立して節を成り立たせることはなく、証拠性投射、発話行為投射が現れ、その指定部に、デフォルトでは話者によるコントロールをうける *pro* が存在する。

Kuroda (1973) の云う「非報告体」は、認識投射の上位にある発話行為投射の指定部にある *pro* の指示が談話トピックによって決定される時に見られる現象である。この観点から、関連する構文を含む阻止効果の現象を考察した。

本論の考察は、次の文に見られる意味的現象に光を当てる可能性がある。

(29) アクセルペダルが故障したかも知れないので、健は車を路肩に停めた。

「かも知れない」のようなモダル表現は伝統的に「話し手の態度」(益岡 2007) を表すものと考えられ、話し手(のみ)の視点を表現するものと見なされている。しかし、田村(2013, 第2章(68a))による(29)では、健が「アクセルペダルが故障したかも知れない」と判断し、その判断が理由となって彼が車を停めた と解釈するのが普通である。

Charnavel (2019) による次の例文にも同様の現象が見られる。

(30) Liz left the party because things might have spiraled out of control.

Liz がパーティを立ち去ったのは、彼女の“things might have spiraled out of control”という判断によるものであり、彼女の意識の中にモダル *might* が含まれていると考えられる。

このような現象は、本論で「視点投射」と考えている領域だけではなくモダルの投射における視点保持者を決定する上で、本論の考察を拡大することの意義を示唆するものである。

参考文献

- Aoki, Haruo (1986) Evidentials in Japanese. In: Chafe, Wallace and Johanna Nichols (eds.) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*: 223-238. Norwood, NJ: Ablex Publications.
- Charnavel, Isabelle (2019) Perspectives in causal clauses. *Natural Language & Linguistic Theory* 37(2): 389-424.
- Hinterwimmer, Stefan (2019) Prominent protagonists. *Journal of Pragmatics* 154: 79-91.
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』 大修館, 東京.
- Kuroda, S.-Y. (1973) Where epistemology, style and grammar meet-a case study from Japanese. In: Anderson, S.R. and P. Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle*: 377-391. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』 くろしお出版, 東京.
- Nishigauchi, Taisuke (1999) 'Point of view' and phrase structure. *Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin* 2: 49-60.
- 西垣内泰介 (2014) 「エンパシーと阻止効果—「自分」の束縛と「視点投射」—」『言語研究』 146.

- 西垣内泰介 (2015) 「ロゴフォリック階層と視点投射」 *Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin* 18: 85–102.
- Sells, Peter (1987) Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18: 445–479.
- Speas, Margaret (2004) Evidentiality, logophoricity and the syntactic representation of pragmatic features. *Lingua* 114.3: 255–276.
- 田村早苗 (2013) 『認識視点と因果—日本語理由表現と時制の研究』くろしお出版, 東京.
- Tenny, Carol L. (2006) Evidentiality, Experiencers, and the Syntax of Sentience in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 245–288.

Author's web site: <https://researchmap.jp/KelKroydon/?lang=japanese>

(受付日: 2022 年 1 月 10 日)